植草学園短期大学研究紀要　第15号　21 ～ 26頁（2014）

# 障害のある子を含む保育（インクルーシブ保育）への保護者の意見

## A Study on the Parent's Opinion about Inclusive Practice of Disabilities and Developmental Disorder in Early Childhood Care and Education

田村　光子　　根本　曜子

本研究では、インクルーシブ保育についての保護者の意見を検討した。保護者の意見から「障害がある」「発達の遅れがある」こと以外に、「集団でうまくいかない」という不安感を感じている保護者が一定程度いることがわかった。予想以上にインクルーシブ保育を前向きに受け容れる保護者が多く、「違いがあることを受け容れる」「ともに生きる」といった力が、インクルーシブ保育の中で育まれることが期待されていた。さらにインクルーシブ保育は、保護者への高い信頼のもとに展開されていることがわかった。

**キーワード**：インクルーシブ保育、保護者の意見、アンケート調査

### １．はじめに

現在、多くの幼稚園、保育所において障害のある子どもが在籍し、様々な子育てをめぐる社会状況から、より一層の保護者支援が求められている。本研究では、障害のある子にも、ない子にも、その他いろいろな支援のいる子ども一人ひとりについて、ニーズに応じた適切なサポートを行う保育、インクルーシブ保育に着目した。インクルーシブ保育の充実には、障害のある子どもをはじめ、さまざまな子どもたちの個性を受け入れ、子どもたち一人ひとりが主体的に活動する姿や子ども自身が実際の関わりの中で「できること、できないこと」について自発的に理解したり支え合ったりすることを、保育者や保護者が支え、促進する保育環境が求められる。

筆者は、平成20、21年度の植草学園大学共同研究「幼稚園教育が直面する複合課題に関する共同的研究」（研究代表者：植草学園大学　教授　太田俊己）において、「統合保育創始期における家族の置かれた状況に関する研究」を実施した。昭和40年代から、先駆的に障害のある子の受け入れを実施してきた研究協力園において、当時の保育や子育ての状況について数名の保護者による回想文を考察した。昭和40年代当時、障害のある子どもの受入れにあたって、どこかにモデルとなる幼稚園があったわけでもなく、試行錯誤しながら、保育に取り組んできた保育者と保護者の苦労の様子が理解できた。一方で、保育について強い信頼と感謝の気持ちを、その後、数十年を経ても保護者が大切に感じていることから、インクルーシブ保育には、保育への信頼を育む視点があり、障害のある子とその家族の人生のスタート地点における支援がとても重要であるという示唆をうけた。

この結果をうけ、平成22、23年度の植草学園大学共同研究「インクルーシブ保育の充実をもたらす促進要因に関する実際的研究」において、今現在インクルーシブ保育を実施している研究協力園で、その取り組みに対する保護者の受けとめ方と保育へのニーズについてアンケートをとり、保護者が園の保育について、どのように感じているのかを調査したいと考えた。インクルーシブ保育の充実については、障害のあるお子さんの保護者だけでなく、健常児およびその保護者も含めた広い理解と協力が必須であること、さらに、保護者の保育者への信頼や保育内容の理解について、保護者全体の意識や思いを知ることができる調査を実施することが必要だと考えた。

植草学園短期大学

## ２．研究方法

インクルーシブ保育がよりよく行われるには幼稚園側の取り組みだけでなく保護者の理解と協力が重要である。そこで幼稚園の取り組みに対する保護者の受けとめ方と保育へのニーズを把握することを目的として、アンケート調査を実施した。実施にあたっては本学研究倫理基準に則り実施した。

調査項目は、①回答者およびお子さんについて（属性、年齢、お子さんの兄弟がいるかどうか）、②お子さんの育ちについて（発達に気になる点は特にない／お子さんが集団で過ごすなかで気になる点がある／発達に気になる点がある／障害がある／その他）、③所属園の保育のよさ【複数回答可】（屋内や外の保育環境がよい／教育方針や保育の方向性がよい／園の規模や園児の数がよい／保育の内容（日々の活動内容、行事等）がよい／発達の専門知識がよく保育に生かされている／障害の専門知識がよく保育に生かされている／保育の専門的知識がよく毎日のとりくみに生かされている／先生方が信頼できる／親が相談しやすい／子どものことをよく把握し理解している／子どもとよくかかわってくれる／子どもの自由を大切にしている／大学やなど専門的な機関と連携協力している／小学校や他の幼稚園と連携協力している／その他（記述）、④インクルーシブ保育の認識【複数回答可】（インクルーシブ保育という言葉を以前から知っている／言葉は初めて知った。障がいのある子もない子もいっしょの保育は知っている／現在の幼稚園に入園する前から、障がいのある子もない子もいっしょに保育することを知っていた／現在の幼稚園に入園してから、障がいのある子もない子もいっしょに保育することを知った／このアンケートではじめて、障がいのある子もない子もいっしょの保育を知った／その他（記述）、⑤インクルーシブ保育の効果【複数回答可】（障がいのある子・ない子に関係なく、幼稚園はどんな子も受け入れたほうがよい／障がいのある子とない子はなるべくいっしょにいる方がよい／いっしょに過ごすと、子どもは助け合いや、支え合いを学べる／いっしょに過ごすと、子どもは心が安定する／いっしょに過ごすと、子どもは積極性や自己肯定感が高まる／いっしょに過ごすと、子どもは障がいやいろいろな個性を自然に理解する／保護者同士で助け合う・支え合う意識が高まる／保護者にも障がいや子どものいろいろな個性への理解がすすむ／保護者同士も育つことで、子育てへの意識や自信が高まる／いっしょの保育で、どの子にもやさしい保育になる／いっしょの保育で、保育（日々の活動内容や行事等）が豊かになる／いっしょの保育で、日々の保育がより専門的に、深まる／幼稚園では、子どものこと、発達などについて相談しやすくなる／幼稚園では、保護者が支えられる関係づくりができやすくなる／幼稚園では、先生方の保護者・子どもへの思い・配慮が深まる／その他（記述）、⑥これからの園での保育・インクルーシブ保育へ期待すること（記述）である。

調査方法は本研究の協力園である４園の保護者を対象とした。調査期間は平成23年11月７日～18日、各幼稚園で配布・回収を依頼した。配布数は456部、うち回答者数は312名であり、回収率は68.4％であった。回答者は母が293名。父、その他は19名であった。

## ３．結果と考察

### (1) 回答者について

回答者は母が293名。父、その他は19名であった。年齢の内訳は20歳代が４％、30歳代が49％、40歳代が21％、その他不詳が26％であった。

### (2) 子どもの育ちについて

調査項目は、①回答者およびお子さんについて、に続き②子どもの育ちについての回答は（複数回答あり　回答率97.7％）（図－１）７割が発達に気になる点は特にないであった。しかしながら「お子さんが集団で過ごす中で気になる点がある」については４園ともほぼ同じ水準だった。障害や発達を気にしていないが、子どもの育ちに不安を抱えている保護者が15％前後存在することがわかった。さらに、兄弟がいるかどうかの子どもの属性で、一番上又は一人っ子と思われる保護者を抽出したところ、19％に増加した。

### (3) 所属園の保育のよさ

図－２の通り、「保育、発達、障害の専門知識がいかされている」「大学等専門機関との連携」も選択されてはいるが、「先生方が信頼できること」が一番高くなった。回答者311名のうち254名約82％が選択した。次に「教育方針や方向性」、次いで「子

どもとよく関わってくれる」であった。４園では長年の保育の中で保護者との信頼関係を築くことができているということがわった。そして、保育の良さを実感するためには保護者からの信頼を築くことが重要だと言える。また、子どもの育ちについて、図－１の「発達に気になる点は特にない」以外の保護者だけでみると、この信頼に次いで、「子どもをよく把握・理解している」が高くなった。

次に設問以外によいと感じる点を記述式で回答してもらった。先生方への信頼に関した意見では「先生方が保育に真剣に取り組んでいることがよくわかる」「先生方が信念をもって保育にあたっていらっしゃる」「先生方が生き生きと活躍されている」「先生方同士の連携が素晴らしい」「先生同士のコミュニケーションがとてもよい」「子どもたちの様子を笑顔ではっきり伝えてくれる」「幅広い年齢層の先生方がいてよいと思う」これらは信頼すると言うことの中味、つまり要素と考えられる。これらは一つの意見と言うより、類似の意見が多く寄せられている。

また、「教育方針や方向性」については、「子どもの自主性を大切にしているところ」「先生や親同士のコミュニケーションがよく取れて、園全体に一体感がある」「環境がよい。自然に囲まれ動物たちとふれあう中で、家では体験できない感性が育っていると実感します」という意見を得た。

「子どもや保護者との関わり」での意見では「先生方がきちんと子どもと向き合ってくれているので、叱られても先生の言うことが理解できているのか、幼稚園にいくことを嫌がらなくなりました」「子どもの（気持ちの）裏側をいつも探ってくれるところ」「とても小さなケガやお友達とのささいなやりとりも細かく丁寧に報告してくださいます」「母親同士、父親同士の触れ合いの場が多い」その他としては「震災以降積極的に避難訓練を行ってくれています。パターンも色々でもしなにかあっても、子どもたちも落ち着いて行動できそうですし、預ける側としても安心できます」「放射能の対応。他（の園）は話も聞いてくれないらしい」という意見が出た。

**図１　子どもの育ちについて**

回答者数 301名　回答率 96.5%

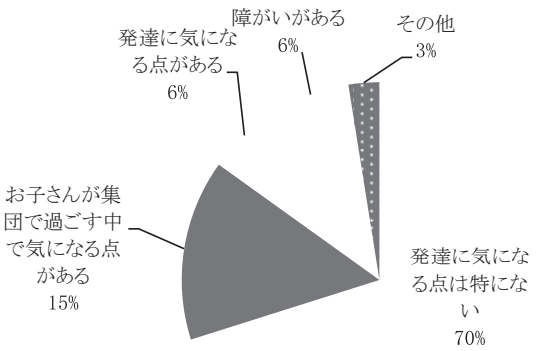
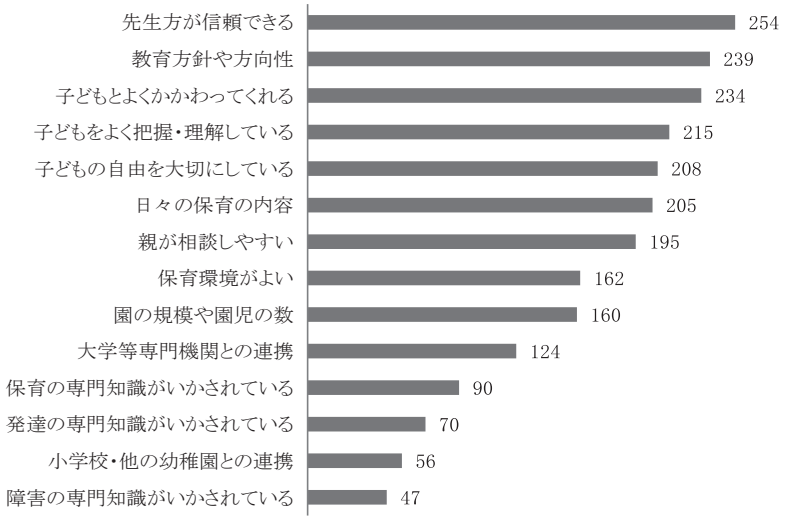



**図２　所属園の保育のよいと感じる点**

複数回答　・　回答者数311名　回答率　99.7%



日頃の先生方の細かい配慮など、保護者はよく見ているといことと、先生方の努力が保護者から評価されていると考えられる。

**(4) インクルーシブ保育の認識**

保護者がインクルーシブ保育について知っているかどうか、また現在の保育についてどのように認識しているかを知っておく必要がある。インクルーシブ保育についての認識について（複数回答可　回答率99.7％）（図－３）は、言葉についての認知について、またそれがいつから認識されるようになったかについて把握したいと考えた。言葉の認知については、インクルーシブ保育という言葉について、「このアンケートで初めて知ったが、障害のある子もない子も一緒の保育については知っている」という回答が高かった。保護者のインクルーシブ保育また、障害のある子、ない子を一緒に保育することについて認識が高いことがわかる。

またいつから認識されるようになったのかについては、図－３では入園前から知っていた回答者が多いが、ここには言葉の認知が依然からあった人も含まれるため、言葉についての認知以外の項目の回答者（「入園前から一緒に保育することを知っていた」「入園してから一緒に保育することを知った」「このアンケートで初めて障害のある子もない子も一緒に保育することを知った」「その他」の４項目の回答者）を抽出し調査（図－４）したところ、入園後に知った、このアンケートではじめて知ったという回答者があわせると７割弱いることが把握された。またその他の回答では「（保育について）障害の有無などもともと関係ないと考えていた」「ずっと前から普通に（意識的にではなく）行われていると思っていた」という回答も多かった。保護者がインクルーシブ保育を前向きに受け入れる認識が高い一方で、入園に際するインクルーシブ保育についての認識度は低いことも伺えた。

**図３　インクルーシブ保育への認識**

複数回答　・　回答者数311名　回答率　99.7％

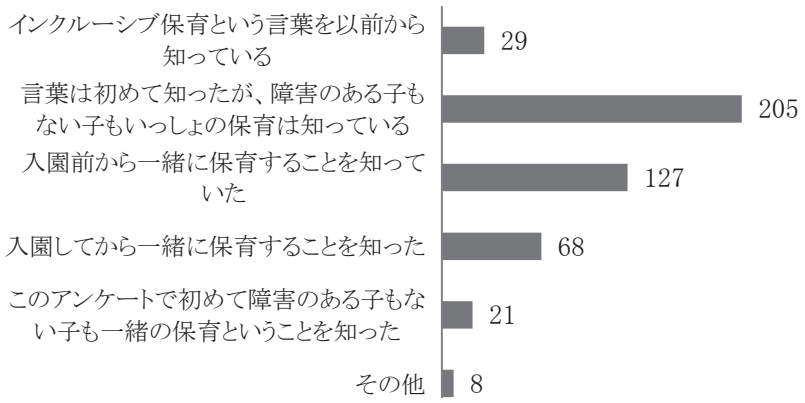
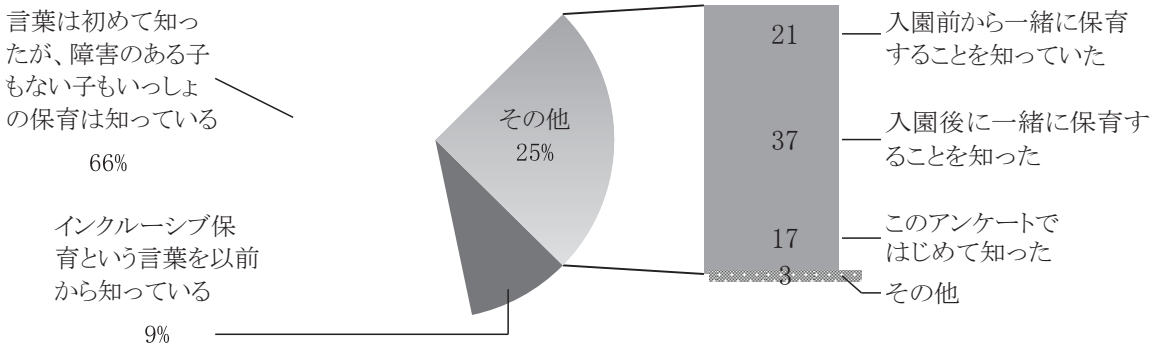



**図４　インクルーシブ保育の認識（４項目抽出の結果）**



### (5) インクルーシブ保育の効果

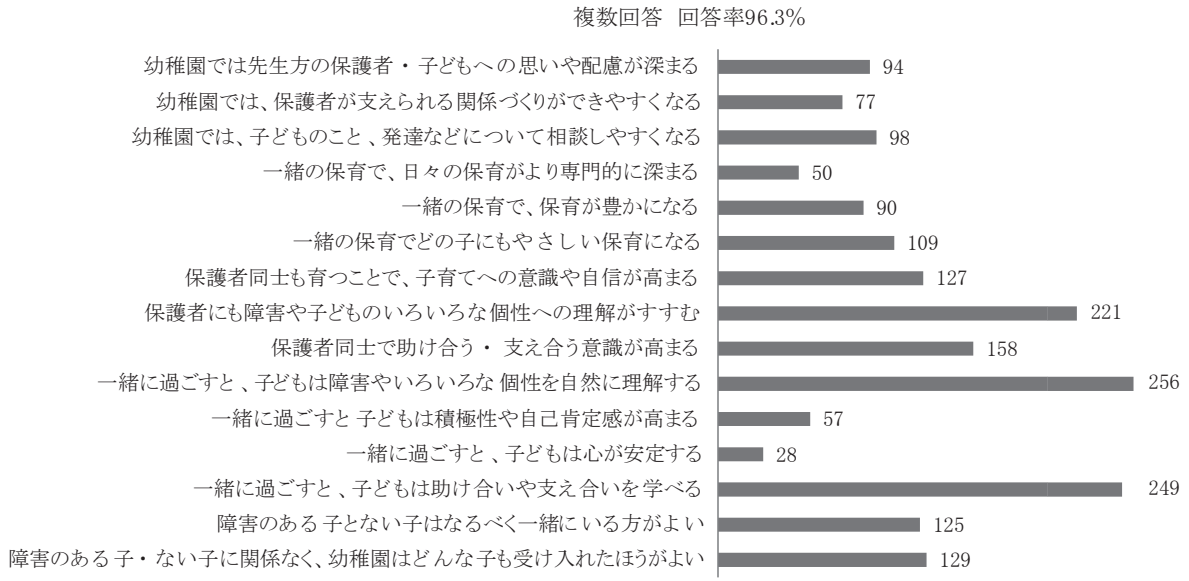
インクルーシブ保育の効果については、無制限回答とし、以下のような結果を得た。（図－５）（回答者数300名、回答率96.2％）「障害のある子とない子が一緒に過ごすことで、子どもが障害やいろいろな個性を自然に理解する」「一緒に過ごすと子どもが助け合いや支えあいを学べる」という項目が高く、さまざまな人間関係の中で子どもに身につけてほしい力として保護者からの期待が高いことがわかった。また「保護者にも障害や子どものいろいろな個性への理解がすすむ」についても高い支持があり、保護者自身も子どもとともに身につけたい、また理解したいと考えていることがわかる。障害がある、または発達に気になる点がある保護者に限定して集計すると、「一緒の保育でどの子にもやさしい保育になる」という回答が一番高い。障害のあるお子さんをもつ家族としては、自身の子どもだけでなく、インクルーシブ保育の理念が保育全体に効果をあげることを期待していることがわかる。

さらに、その他の効果について記述式で回答をもとめたところ、３割弱の保護者より回答をえることができた。代表的な回答としては、「幼稚園の中で小さな社会がそのまま経験できる」「子ども自身がまだ小さいので理解していませんがさまざまな人やたくさんの違い（個性）があることが自然であるということを“あたりまえ”と思って育ってくれれば と思っています」「誰にでも“できること”“できないこと”があって、それは個人によって違う、だから自分が出来ることは助けてあげて、出来ないことは助けてもらうということを自然に身につけられると思います。年少ですでにそういう気持ちが出てきているように感じます」「障害をもつ方と暖かい目で接することができるようになってほしいと同時に、その方の優れているところをたくさん見つけて、同じ人間同士尊重し、尊敬し合える心が育てば幸いです。また“障害”について避けることなく親子で話す機会になることもよい点です」「障害がある、ハンディがある子どもをもつ親が園の中にも身近にいることになり、学校や療育の話、情報交換ができる。親が孤独感を持たなくてよい」等であった。障害・個性などを自然に理解できる、あたりまえの環境の中で理解していく中で子どもの育ちがあること、また「親の孤独感」など保育に求められる社会的環境についても保護者の視点があることが明らかになった。

### (6) インクルーシブ保育への期待

インクルーシブ保育への期待については、記述式の回答であったが高い回答率であった。（自由記述式回答　回答者数　131名　回答率　42.0％）代表的な記述として以下のようなものがあった。「運動会で一緒に走ってリレーしている姿を見て感動しました。皆が協力したり、一緒に楽しんでいる姿はと

**図５　インクルーシブ保育の効果**



ても自然で美しく思えました」「園児時代からインクルーシブ保育によって障害のある子と共に生活していると障害のある子のためにどうしたらよいかという考え方ではなく『違う方法ならみんな楽しめるね！』と子どもたち自身が考えるようになっていると思います。これは障害の有無に限らず、障害のない子どもたちの先（将来）の生活の中にも大切な貴重な経験になると思います」「子どもたちはインクルーシブ保育の中で経験し、育っていくので根付いていくと思うが、その子をもつ親である私たちこそ、そのような経験が少ない（もしくはない）ので親が学べるような場をぜひもっと父母会の際などに設けていただきたいです」「継続をお願いします。両方（障害のある子とない子）の子どもと親の理解がある為に必要だと思います。障害があることが分かりづらい場合に、（なぜ）そうなのか？と思うことがあり、戸惑う時があったので、インクルーシブ保育をする園では、オープンにしてもらった方が対応する時に役立つと思います」

子ども自身の姿から、障害のある子もない子も共にいること、違いがあることをあたりまえに受け入れることを学ぶ保護者の意見が見られた。また、保護者側の認識について反省させられたり、積極的に推進するためにもきちんとした説明が必要だという意見もいくつかあげられた。

## ４．まとめ

今回の調査は、平成20、21年度の調査で、「就学前におけるインクルーシブ保育が保護者に高い信頼感を与えていた」ことを踏まえ、現在の保育をうける保護者の認識はどのようなものかを知る一歩として実施されたものである。研究者としての視点からは、批判的な意見も多いのではないかという前提で、インクルーシブ保育の理解と促進も願って、調査項目を選定した。そのため、保育の良さ（満足感）を中心に聞く内容となっている。しかしながら、その影響の考慮を含めても、今回の結果からは、予想以上にインクルーシブ保育を前向きに受け入れようとする保護者の意見が多かった。その背景には、「障害がある」「発達に気になる点がある」とまではいかなくても、「集団でうまくいかない」といった子どもの発達に対する不安感が高いことも一部要因としてあるだろう。また、「違いがあることを受け入れる」「ともに生きる力をつける」といった力を子どもに身につけてもらいたいと考えており、それがインクルーシブ保育の中で育っていくことを期待している保護者が多くいた。また、障害のある子どもを育てるうえでの孤独感についても指摘があった。これらを踏まえると、子どもの育ちについて社会的な視点からとらえていこうという機運が、こうした取り組みをしている幼稚園では育まれているように感じる。

今では多くの幼稚園、保育所において障害のある子どもの受入れがなされ、社会状況から一層の保護者支援が求められている。研究協力園では保育者への高い信頼のもとに、よりよいインクルーシブ保育の展開があると考えられる。インクルーシブ保育は特別な実践ではなく、日々の保育実践をしっかりと充実させることが基礎となっているのではないかという示唆を得ることができた。そして、保育者だけでなく、保護者の協力をもって、子どもの育ちがあることを、改めて考えさせられる結果となった。

今後の研究課題としては、「先生方への信頼」はどのように育まれるのか、インクルーシブ保育という実践の中で、どうやって信頼を築いていくのかについて実践的な研究を進める必要があるだろう。本研究が、保護者支援の必要性が問われる中で、障害のある子の保育分野の保護者の理解を広げていく一助となれば幸いである。

### 参考文献


(1) 植草学園大学共同研究報告書（2011）幼稚園教育が直面する複合課題に関する共同的研究
(2) 田村光子・太田俊己（2004）知的障害児（者）の生活支援ニーズとその実践的課題．千葉大学教育実践研究　第11号
(3) 根本曜子・高倉誠一（2012）　集団生活が苦手な子どもの育ちと支援．日本保育学会第65回大会発表要旨集．126
(4) 葛飾こどもの園幼稚園創立50周年記念誌（2004）　感謝　このままの姿で